

# 学生が参加する授業実践の研究

川野 司

九州女子短期大学

## 1. 授業改善の取り組み

平成21年4月から、本学で学生を教育する機会が与えられた。学生の教育ができる喜びとは裏腹に、授業をどのように進めていったらよいのか不安があった。書店で『授業を変えれば大学は変わる』のタイトルが目についたので購入した。その本を読んで大学の様子がおぼろげに把握できた。大学でも分かる授業や授業評価が重視されていることを知った<sup>1)</sup>。また浅野誠の『大学の授業を変える16章』を参考にして、下の「担当科目の授業の進め方について」を作成し、第1回目の授業の心構えと資料の準備を進めた<sup>2)</sup>。

担当科目の授業の進め方について	川野 司
1 授業のねらい	
	<ul style="list-style-type: none"><li>・その科目をなぜ学ばなければならないのか。</li><li>・その習得が現在や将来の自分にどのように役に立つのか。</li><li>・授業で自らが何をしていたらよいのか。</li><li>・皆さん自身の学習や討論を通して、友との協力関係を培ったり、友やクラスの善さを感じながら活発な授業の展開につなげたい。</li><li>・人間性の一面である好き嫌いや利害損得の世界から離れ、お互いに励まし合い、限りある大学生活を有意義に過ごして欲しい。</li><li>・生き方や進路を模索する皆さん方の役に立ちたい。</li></ul>
2 授業の特質	
①楽しい	
	<ul style="list-style-type: none"><li>・心と頭を使って自ら参画するから。</li><li>・友達と一緒にやるから。</li><li>・人間としての生き方なり方をやるから。</li><li>・学校現場の生の話を聞けるから。</li><li>・教員の楽しさや難しさが分かるから。</li><li>・自分が教員になったつもりになれるから。</li><li>・自分が生徒になったつもりでやるから。</li></ul>

②難しい

- ・各自が多くの科目を受講しているから。
- ・卒業や修了時期と重なっているから。
- ・実習や就活をやっているから。
- ・教員採用試験(7、8月)や他の試験に近いから。
- ・やるべき作業が多いから。
- ・不可をとると資格が取れないから。

③学習方法

- ・学生の皆さんの主体性や創造性が基本です。
- ・多様な学習(読み書き、討論、活動)を取り入れたい。
- ・学生の皆さんの協同作業が基本です。
- ・不明な点は後で調べて報告します。

④ 授業改善の方向

- ・講義拝聴型から積極的な参加や討論型の授業へ
- ・問題を論じるだけでなく、問題の分析や解決をするグループ討議の方向へ。
- ・教員中心の授業から学生参画型の学習へ。
- ・自律した学習者になるように、皆さんのニーズに重点を置く学び方学習へ。

3 評価の仕方

- ・積極的に意欲的な自ら学ぶ姿勢を大切にしたい  
出席、発言や発表、質問、協同作業、レポート、試験等)。

授業では、教える内容を充実することは当然だが、事前の「授業レジュメ」と「板書事項のまとめ」の作成に多くの時間を費やした。一方、学生が授業内容を自ら学習するには、レポートを要求することも必要であると考えた。しかし、学生にとって本当に役立つ学習は、授業に関わる内容を自分で学習することである。大学設置基準の科目履修では、1単位の講義に対して3時間の自学が要求される。こうしたことを考慮すると、毎回の授業内容を学生が自分の言葉でまとめ、それを自学の記録として残すことが必要であると思った。学習のまとめは、学生の自己学習の記録であり、ポートフォリオといえる。学生が後で振り返った時、自己の学習内容が形として残り、自分でもやれたという自信につながる。そこで下記の「授業のまとめシート」を作成して、次時の授業開始前に提出させるようにした。

授 業 の ま と め シ ー ト		
提出日 平成21年 ( ) 月 ( ) 日 氏名 ( )		
科目名： ( )	担当教員：川野 司	対象学年： ( ) 科 ( ) 年
第1回目の授業テーマ：「オリエンテーション」		平成21年 ( ) 月 ( ) 日
<p>◆ 本日の授業のまとめ (800字程度)</p> <p>◆ 質問・疑問点 (200字程度)</p> <p>◆ 感想・意見・要望等 (200字程度)</p>		

学生は真面目に毎回の「授業のまとめシート」を提出している。特に、「感想・意見・要望等」を見ることは、授業を進めるうえで参考になり、学生が書いている内容を知ることは自らの励みになった。また「質問・疑問点」に書いてあることは、個人的な質問ではあるが、他の学生も同様な質問を持っているのではないかと、他の学生の質問を知ることは学習で役立つのではないだろうか、などの思いに至った。そこで、次の「Q&A」を作成して学生に配布することにした。

教育法規6回目授業テーマ「教科書と補助教材」のQ&A

Question	Answer
Que. 1 義務教育期間の公立学校では教科書は無償だがなぜ価格があるのか？	Ans. 1 教科書は市販されています。また国が教科書会社に代金を支払いますから定価は必要です。
Que. 2 教科書を使用しない授業をしない方がよい...となっていますが、教科によっては教科書を使用しないで、すべてプリント使用の授業もありますが大丈夫なのですか？	Ans. 2 大丈夫ではありません。教科書を使用しない授業はよくありません。教師は教科書を使用する義務があります。仮にプリント学習が中心でも(プリント学習が常態では望ましくありません)教科書を使わなければなりません。生徒や保護者に不安を与えないために、管理職は日頃の授業の実態を把握し、必要と思えば教師を指導することが大切です。
Que. 3 教科書を必要としています、教科書を使わない授業もあります。よいのでしょうか？	Ans. 3 よくありません。教科書は主たる教材ですから、教科書を使用する授業をしていくことが必要です。Q2の回答と同じです。
Que. 4 選考された教科書は実際に使われるようになるけど、教科書の検定は各都道府県ごとに行うのですか？それとも国の機関で各都道府県に検定結果を通知するのですか。	Ans. 4 教科書検定は国(文部科学省)が行います。検定に合格した教科書の中から、各都道府県教育委員会が規則に従って使用する教科書を決めていきます。教科書として使用できるか否かの検定結果は教科書会社に連絡されます。(以下略)

一方、提出された「授業のまとめシート」を見ていくなかで、「授業のまとめシート」や「授業レジュメ」を電子データとして、学生が利用できないものだろうか考えた。そこで、情報処理教育研究センターの担当者に相談に行った。すぐに電子データ化は出来ないが、なんとか実現できる方法を考えてみようという回答であった。6月下旬にテストケースの「Webクラス」ができあがった。そのために必要なデータは、科目を受講している学生の「学籍番号と氏名」「科目名と曜日及び時限」「科目のシラバス」「科目の授業レジュメ」「授業のまとめシート」「授業の板書事項」などであった。学生に電子データの取り扱いを説明するために、情報処理教育研究センターの担当者からパソコン室で、「Webクラス」の使用について解説してもらった。授業に関わる資料を電子データで取り扱う方法は、多様な授業方法が求められる現在、e-learningとして大切な授業スキルの1つである。

大学の授業は、講義、演習、実験、実習、ゼミ形式など様々な形態で進められている。でもその大半は講義形式による授業が行われている。一般的に講義では、教員が本時の授業テーマについてレジュメや関係資料を準備し、それに従って授業を進めている。パワーポイントやOHPを活用したり、パソコン教室でパソコンを使いながら、視覚に訴える方法の授業も取り入れられている。いずれの授業においても、そのねらいは学生に分かりやすく、楽しい授業を行うことである。ところが多くの授業では、学習の主体である学生自身が受け身の姿勢になっている現実がある。

換言すれば、教員が学生に対して何か一定の知識を授ける授業形式になっている。学生自身は、教員からの一方通行の知識伝達内容を聴いているだけである。学生は講義の要点をノートに書き写したり、関係プリントを見ながら、その授業内容を把握している。板書事項や話したことをノートに書いている学生はよいにしても、なかには私語をしたり携帯電話を見たり、机にうつ伏せている学生もいる。あまり態度が良くない学生は注意を受けるが、注意もされずに黙認される場合もある。大学ではこのような授業スタイルが定着し、教員も学生も違和感を感じていないようだ。双方ともに、こうした授業形態を当たり前と思っている。そして、このような授業を改善する動きは少ない。教員自身は授業を何とかしたいという気持ちはあるものの、そのことが見えにくい。

大学では小中学校で見られる研究授業や、その後の研究協議会を通してお互い同士が自分の授業を見直す取り組みは行われていない。平成20年度から大学のFD義務化にともない、お互いの授業を見せ合う必要性と授業研究の認識は出始めてはいるが<sup>3)</sup>、実際の授業場面での取り組みはほとんど出来ていない。

一昔前までは、教員が講義ノートを中心に一方的に喋り、計画的ではない板書を学生がただ黙って書き写す風景が見られていた。それが大学の講義であり大学の授業と考えられてい

た。双方ともそれが当たり前であり、大学とはそうしたものであると認識されていた。大学では90分間の授業が通常行われている。小学校が45分、中高校が50分の授業時間に比べると、学生には90分はかなり長い時間帯である。

そこで、どのような授業形態をとれば、学生が積極的に参加意欲を持ち、自ら考え自ら主体的に学ぶ力が身に付くのだろうか。「授業のまとめシート」のことはすでに述べたが、グループ学習や学生が課題を発表することを一部取り入れて授業を進めた。また学生が参加するの授業をイメージしたが、実際の授業では毎日の授業準備に追われて余裕がなくなり、教師主導型の一方通行の授業になってしまった。教員が事前に授業内容を準備することは大切だが、講義ノート中心の授業は、学生には受け身の授業であり、興味をもてる授業と言えない。授業では、教員の専門性を生かした研究や課題などの情報提供も必要である。教員自身が現在取り組んでいる研究に関する話題に、学生は知的好奇心をくすぐられるかも知れない。そのためにも教員は、教育と同時に研究の実績を積み重ねることが求められる。

## 2. 学生が参加する授業への転換

そこで、平成21年度前期の授業が講義中心であった反省を踏まえ、21年度後期授業では、学生が参加する双方向型授業を目指すことにした。後期の第1回授業オリエンテーションでは、各授業のシラバスの説明のなかで、学生が参加するの授業について、次のプリントを配布して授業を進めていく話をした。

双方向型の授業について（専攻科1年）

川野 司

1 目的

授業を受け身で受講するのではなく、参画意欲を持ち、自ら考え自ら学ぶ姿勢を醸成する。

2 学生が参加する授業が指すもの

- ① 教壇からの「一方通行型」の「知識伝達型」授業から脱し、学生と教員とが共に「知を創造」する。
- ② 学生が日常的に学習ができる環境づくりに努める。授業は学期末の単位履修の試験勉強ではない。
- ③ 学生が予習や復習を行い、自分で考える力と習慣を身に付ける。
- ④ 自らが授業に参画している実感を抱かせ、知の創造や学習の喜び及び充実感を味合わせる。
- ⑤ 学生も教員も共に楽しい授業づくりを目指す。

3 授業の具体的な進め方

- ① 各グループ（2名）が、13のテーマの中から発表のテーマを1つ選択する。
- ② 発表のテーマは、シラバスのテーマ（教科書の頁）の中から選択する。なお、発表テーマが競合した場合は、ジャンケンで勝った方が好きなテーマを選択する。
- ③ 各テーマの発表グループには、13回の授業日を当てる。
- ④ 1回の授業時間で、グループが選択した1テーマについて発表し、その後、発表テーマについて集団討論をする。
- ⑤ 各発表グループ（木の1限目）は、発表レジュメ（資料があればそれも）を前日の水曜日までに川野に提出する。また発表当日までに全員分のレジュメ（資料があればそれも）を事務室でコピーし発表当日に配布する。なお発表レジュメは、次のアかイのいずれかを選択して自分でまとめる。
  - ア 教科書の頁内容をまとめる。
  - イ 教科書の頁内容の疑問点や問題点を提起し、自分の考えや意見を述べる。
- ⑥ 発表時間は各グループ20分、その後の質疑応答及び討論は40分とする。
- ⑦ 発表における司会進行及び計時は、次回の発表グループが担当する。
- ⑧ 毎回の発表当日には、全員が事前に教科書の発表内容の頁を読んだの考察を中心にまとめた予習レポートを提出する（手書き不可・フォント12・字数は制限しないがA4サイズ1枚）。予習レポートは授業開始前に回収する。当日の発表グループは予習レポートは提出しなくてよい。
- ⑨ 発表方法は各グループが自由に考える。レジュメ以外の資料があってもよい。また発表のために使用する機材（パワーポイント、OHP、スライド、模造紙等）は事前に川野に連絡すれば、事務室と協議して準備したい。
- ⑩ 発表グループは、発表後の協議会（質疑応答や討論）の内容をまとめ、まとめたプリントを次回の授業で全員に配布する。
- ⑪ 参加者から発表に対する3項目評価（レジュメ、発表、質疑応答）と自己評価を行う。

4 単位認定の評価

- ① 学期末の論述式テスト（2題：解答用紙の字数はB4裏表程度）60%
- ② 出席、発表毎の予習レポート（12回分）、発表、質疑応答など 40%

【3項目評価表】

発表テーマ	
レジュメの評価	よい 普通 よくない 3 2 1 (理由: )
発表の評価	3 2 1 (理由: )
質疑応答の評価	3 2 1 (理由: )
評価の合計点	( ) 点
発表に対する一言	
自己評価 (満足度)	3 2 1 (理由: )

さらに、大学における授業は、学生の出口を視野に入れたアウトカムを保証することが大切である。既存の知識や技術を伝えることも大切だが、学生の卒業後の社会生活を視野に入れた教育が必要である。学生が創造的に物事を考え、仕事をしていくなかで課題や問題を解決できる論理的な思考力を習得させることが重要である。教育界のキーワード「生きる力」を中心にし、「全人的な力」と「課題探求の力」を身に付けさせることである。自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考えて判断し、主体的に行動できる力を学生に習得させたい。そのためには、教員自身が常に生きる力を追い求めることが大切であり、そのことを授業のなかで実践する姿勢を持ち続ける必要がある。理論よりもまずは実践と実行とである。

また大学の教育および授業の改善を目指す取り組みの一例として、TA（ティチャー・アシスタント）やSA（スチューデント・アシスタント）が考えられる。TAは、どちらかと言えば、大学院生を学部授業でアシスタントとして活用するものだが、このTAはいくつかの大学の授業で、補助的な活用がなされている報告がある<sup>4)</sup>。TAの本来のねらいは、大学教員としての実践的教育の機会提供であり、大学教員としての体験的教育の場である。大学院生が授業に関わりをもつことで、将来の大学教授職の教育実習の訓練をしていると考えられる。またSAの取り組みは、受け身の授業から脱して、主体的な学びを誘発し、授業そのものに変化と活力を与え、教員と学生の双方の教育力向上に役立つものと考えられる。こうした取り組みを意図的・計画的に行うことが大切である。SAになった学生自身は自分の活躍によって、その授業自体が活性化することを身を持って体験できると思う。そのためには、毎回の授業では教員とSAとの十分な事前打ち合わせが必要である。授業授業ではSAを取り入れた実践も進めていきたい。

### 3. 学生が参加する授業実践

学生が参加する授業は、平成21年度後期授業から取り組んでいる。学生が参加する授業では学生が授業を受け身の姿勢ではなく、自ら参画意欲を持ち、授業の予習をしておくことを期待した。そのために事前に学習課題を準備し、その課題をレポートにまとめて提出させるとともに、代表学生が課題発表を行い、発表に関わる問題を討議する学習形態を取った。前述の「授業のまとめシート」は、学生の復習に重きを置いたレポートであったが、21年度後期では予習を重視したレポート様式を考えた。

たとえば教育学概論の授業では、人間科学部の人間発達学科と人間文化学科の約90名の学生がいた。授業の進め方の説明では、前述の学生が参加するの授業が目指す5点を説明した。そして授業の具体的な進め方は、4人の26グループをつくり、発表のためにグループで研究をするように取り決めて予習課題を与えた。予習内容は、①教科書の範囲内容をまとめる、②科書の範囲内容の疑問点や問題点について自分の考えを述べる、の2つのどちらかを選択して、下の様式で授業レポートを提出させた。

第2週テーマ「人間の形成と教育の本質」の予習レポート	
	提出日 ( ) 月 ( ) 日
	( ) 科 ( ) 年 氏名 ( )
1 考察 (感想・意見・考えなど)	
2 質問・疑問・要望など	

予習レポートは、本来、授業における積極的な予習を勧め、学生が自ら主体的に学ぶ姿勢を習慣づけることを意図したものであった。予習をして授業に臨めば、自ずと授業で質問が出たり、話し合いや協議会が活発になると予想していた。しかし実際には、授業があまり活性化せず、質問もわずかしかなかないので、教員から質問をすることが多くなった。授業の様子も最初にイメージしたものと違ってきた。協議会も思うように活性化できなくなり、司会者は参加学生を指名して、指名された学生は予習レポートを読むことがパターン化していった。そこで今までのレポート形式を改め、協議会を活性化するために、5つの協議課題を事前に課すことにした。その課題から1つ選択して予習レポートを提出することに変更した。

次のものは、変更した予習レポート書き方とその内容の説明である。下線部は特に強調して説明した内容である。なお、課題1について筆者の具体的なレポート記述例を提示した。



教育学概論 第5回テーマ「生涯学習」の予習レポートの課題

下から課題を1つ選択して予習レポートを提出する。予習レポートで「考察」と記載していたのを、「課題○」(○は課題番号)と書き、課題内容を転記してから、課題に対する自己の見解を述べる。課題は協議会の協議課題です。事前に自分の考えをまとめておけば、協議会に積極的に臨めます。予習レポートは、2部準備する。一部は授業前に提出し、他の一部は協議会で書き込みをしながら使用する。なお、予習レポートのコピー(コピーして貼り付ける)はやめましょう。自分で教科書を読んで、自分の意見や考えを書くことが重要です。

- 課題1 あなたは、生涯教育や生涯学習という言葉を知り、どのようなことを思っていますか。また、あなた自身はそれに対してどのように対処していこうと考えますか。
- 課題2 現在、「生涯学習」との言葉は社会的な認知ができています。しかし、いったん学校を卒業して就職した場合、自己の職務上の知識・能力や技能のスキルアップを図りたいと考えた時、再び大学等に入学して自己の専門性が高められる社会状況や制度システムになっているだろうか。また、そうした社会的な認知ができていだろうか。
- 課題3 初等中等教育(小中高校)や高等教育(大学・専修学校)で学んで習得した知識や技能は、すぐに古くなり、社会に出たときには、役立たないものなのだろうか。
- 課題4 現在の学校教育では、「知るための学習」と「するための学習」が中心になっています。一方、「ともに生きるための学習」と「存在するための学習」も学校教育では大切です。今後、この二者を学校教育の中で進めていくためには、どのような取り組みをすればいいかについて、あなたはどのように考えますか。
- 課題5 「自己決定学習」が社会的に認知され、インフォーマル学習が行いやすい社会になるには、どのような制度的しくみやシステムが必要になってくるか、あなたの考えを述べなさい。

#### 4. 学生が参加する授業の評価

学生が参加する授業を行った結果、学生自身が授業をどのように思っているかを第14回目の授業で調査した。調査項目は、学生が参加する授業の目的と目指す5点の結課を問う視点で作成した。アンケート内容は次のものである。

21年度後期授業についてのアンケート：科目名（ ）

授業の始めに、「双方型の授業について」の説明をしました。授業について、率直な意見をお願いします。□に番号を書いてください。

問1 あなたは、参画意欲が持てましたか。 ……□

①まあまあ持てた ②どちらとも言えない ③あまり持てない

問2 あなたは、自ら考え、自ら学ぶ姿勢ができましたか。 ……□

①まあまあできた ②どちらとも言えない ③あまりできていない

問3 あなたは、日常的に学習ができる環境づくりに努めましたか。 ……□

①まあまあできた ②どちらとも言えない ③あまりできなかった

問4 あなたは予習や復習を行いましたか。 ……□

①まあまあできた ②どちらとも言えない ③あまりできなかった

問5 あなたは、自分で考える力や習慣が身に付きましたか。 ……□

①まあまあ付いた ②どちらとも言えない ③あまり付いていない

問6 あなたは、自らが授業に参画している実感が持てましたか。 ……□

①まあまあ持てた ②どちらとも言えない ③あまり持てなかった

問7 あなたは、この授業が楽しいと思いましたか。 ……□

①まあまあ思う ②どちらとも言えない ③あまり思わない

問8 発表する時間の長さはどうでしたか。 ……□

①十分である ②足りない ③長すぎる

問9 協議する時間の長さはどうでしたか。 ……□

①十分である ②足りない ③長すぎる

問10 あなたは、協議に積極的に参加しましたか。 ……□

①ある程度参加した ②どちらともいえない ③あまり参加しなかった

問11 レポートの内容はどうでしたか。 ……□

①難しかった ②どちらとも言えない ③やさしかった

問12 レポートの記述はどのようにしましたか。 ……□

- ①教科書など読んだり、他に自分で調べて自分の考えを書いた
- ②ネット検索などをして、コピーして貼り付けたことが多かった
- ③だいたい自分の意見を書いたことが多かった

問13 協議会を活発にするためのあなたの考えを率直に書いてください。

問14 こうした授業の進め方について、あなたの意見を聞かせてください。

問15 双方向型の授業を改善していくために、参考になることを書いてください。

なお、学生が参加する授業の評価について、73名の学生が回答した結果概要は、次のもの

であった。

問1の「あなたは参画意欲がもてましたか」では、「まあまあ持てた」が35.5%、「どちらとも言えない」が49.3%、「あまり持てなかった」は15.1%であった。「参画意欲が持てなかった」と回答している学生が1～2割近くいることは、授業のやり方を工夫する必要がある。一方、専攻科2年13名の授業では、参画意欲が持てなかったという回答が無かったことは、授業の人数にも関係していることが示唆される。

問2の「自ら考え自ら学ぶ姿勢ができましたか」では、「まあまあできた」が42.5%、「どちらとも言えない」が41.1%、「あまりできていない」が16.4%であった。

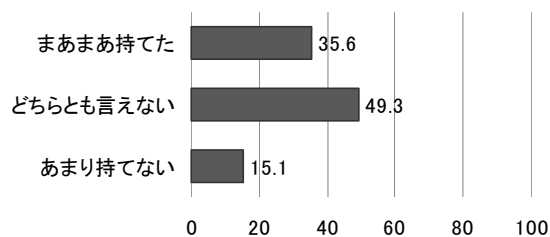
問3の「日常的に学習ができる環境に努めましたか」では、「どちらとも言えない」を含めると、学習への取り組む姿勢は持っていたことがうかがわれる。

問4の「予習や復習を行いましたか」では、「どちらとも言えない」を含めると予習や復習をしていたと思える学生が8割以上いたことになる。

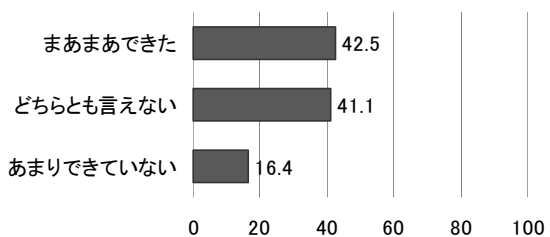
問5の「自分で考える力や習慣が身に付きましたか」では、半数近くの学生が積極的な回答をしている。

問6の「授業に参画している実感がもてましたか」では、参画を実感している学生が2割程度しかいないことは、今後の課題である。

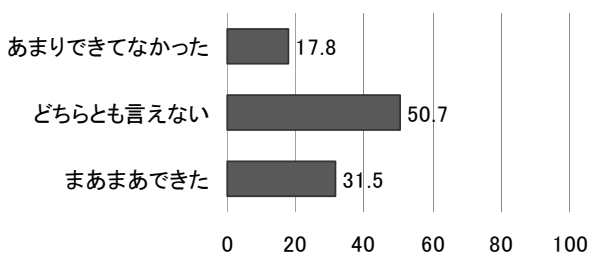
**問1** あなたは参画意欲が持てましたか



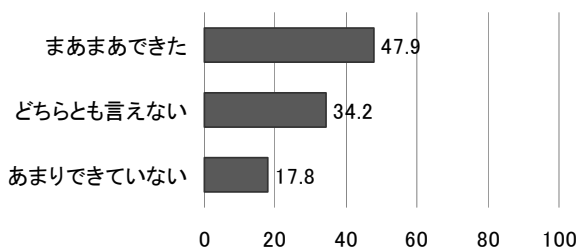
**問2** 自ら考え自ら学ぶ姿勢ができましたか



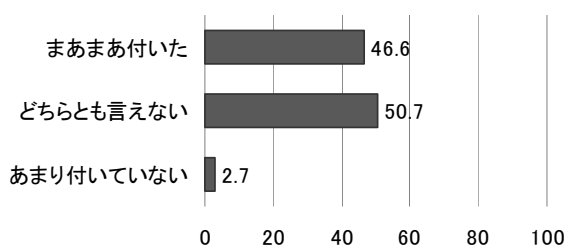
**問3** 日常的に学習ができる環境に努めましたか



**問4** 予習や復習を行いましたか



**問5** 自分で考える力や習慣が身に付きましたか



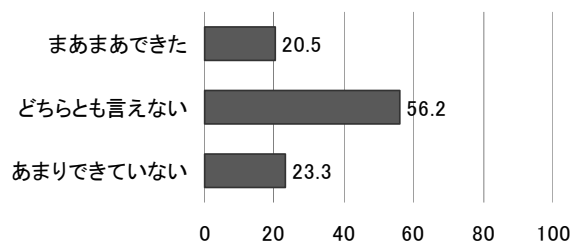
問7の「この授業が楽しいと思いますか」は、「まあまあ思う」が16.4%、「どちらとも言えない」が46.6%、「あまり思わない」が37%となっている。どちらとも思わないを消極的に解すれば、2割程度しか授業を楽しんでいると思っていないことになる。楽しいと思う中味の検討は必要だが、授業を楽しくないと思う学生が多いことは、授業のやり方の工夫が求められる。

問8の「発表の時間の長さはどうでしたか」では、8割近くが十分であると応えている。発表時間は、1グループにつき約15分与えたが、学生はその時間帯での発表がふさわしいと感じているようだ。

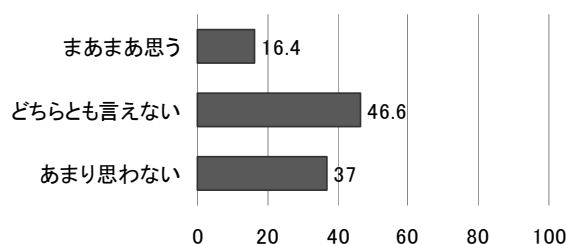
問9の「協議する時間の長さはどうでしたか」については、7割近くが十分であるとしているのに、2割以上が長すぎると答えている。実際には質問を含めて1グループ当たり20分を割り当てていたが、協議が活発でなかったことも影響していると思われる。

問10の「協議に積極的に参加しましたか」では、半数以上の学生が積極的でなかった。これは教員自身が感じていたことと一致した結果である。学生に積極的になれなかった理由を尋ねると、協議会で自分の意見を発表することに抵抗があるとのことであった。担当グループが発表した後で、グループ内で発表内容について話し合う時間を設けて欲しかったと言う。学生は予習をしているから、発表についてグループ

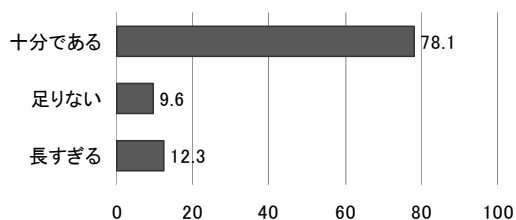
**問6** 授業に参加している実感が持てましたか



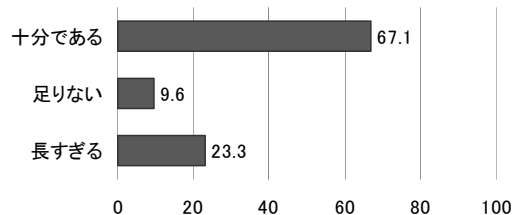
**問7** この授業が楽しいと思いますか



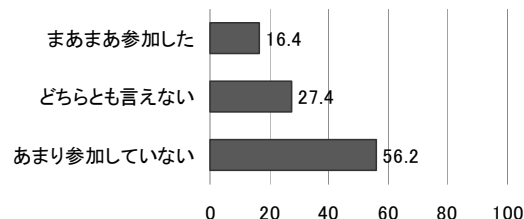
**問8** 発表の時間の長さはどうでしたか



**問9** 協議する時間の長さはどうでしたか



**問10** 協議に積極的に参加しましたか



内での話し合いの時間を取る必要はないと判断していた。しかし協議を活発にするには、そうした時間が必要であった。

問11の「レポートの内容はどうでしたか」では、「難しかった」と思っている学生が4割程度いた。

問12では、7割以上の学生が、教科書を読んでまとめたり、自分の意見を記載しているが、3割近くの者は安易なレポート作成をしていることが分かった。

## 5. まとめと今後の課題

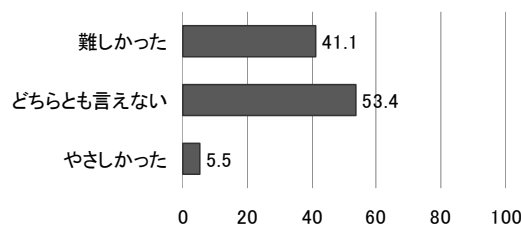
学生が参加する授業は、学部1年生と専攻科1、2年生で試みたが、学部生と専攻科生とは、大きな違いがあった。例えば、問2の「自ら考え自ら学ぶ姿勢ができましたか」では、学部生は、「あまりできていない」は16.4%いたが、専攻科生はいなかった。問12のレポート作成についても、安易なレポート作成（コピーなどの貼り付け）は、専攻科生には見られなかった。こうしたことは、他の問に対しても見られる傾向であった。

その原因の1つは、授業における学生数が関係していると考えられる。90名ほどの学部生に対して、専攻科生は13名～20名である。学部1年生の班編制は、互いによく知り合っていないので、協力して発表はしているものの、何かぎこちなさを感じられる反面、専攻科生では、授業中の発表や質問および協議など、協力してスムーズに行われていた。

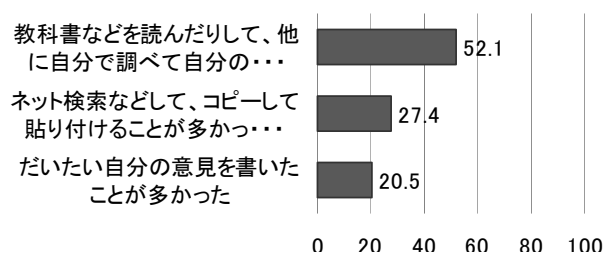
授業後には、毎回、3項目評価表を使用し、発表者に対してはレジюме・発表・質疑応答の視点から、自分に対しては満足度の視点から、簡単な3段階評価を各学生に行った。これによると、学部生と専攻科生との違いは見られなかった。発表に対する一言も「レジюмеが分かりやすくまとめてあって、とてもよかったです」「今回は難しい章であったが、よくまとめられていた」など好意的な記述が多かった。自己評価（満足度）でも、1（よくない）と回答している学生は少なかった。

学生が参加するの授業では、清水亮・橋本勝・松本奈美編著『学生と変える大学授業』<sup>5)</sup>を参考にし、そのなかの「橋本メソッド」を模倣しながら授業を組み立てた。学生が参加する授業を試行してみて、体験的に次の3点が明らかになった。1点目は、学生は発表資料を

### 問11 レポートの内容はどうでしたか



### 問12 レポートの記述はどのようにしましたか



作成することに時間をかけ、自ら学びながら、独自の発表準備をしていた。授業テーマの要約やまとめが効果的に行われた。パワーポイントを使用してプレゼンテーションを行うなど、発表における機器使用のスキル面での向上が見られた。2点目は、発表後の議論の深まりや質問が限られ、表面的な協議で時間が経過したことである。その原因としては、協議会の司会運営のやり方が十分に学生に浸透していなかったこと、予習レポートを提出させているから質問がいろいろ出て、協議会も活発になるという教員の思い込みがあったことなどが考えられる。3点目は、教員が準備したレジュメや資料の説明時間がとれなかったことである。教員の解説が十分でなかったり、学生の意見や考えを引き出せないままに終わってしまった。

一方、問14の「こうした授業の進め方について、あなたの意見を聞かせてください」の回答では、「事前に予習してこれる課題があって、すごくいいと思った」「自分たちで自ら調べて発表し協議を深めていくのは、将来的に必要となってくると思うので、いいと思う」「新鮮で学ぶ上では良いことだと思う」「正直、最初はめんどろうだと思っていましたが、この授業は3、4年生になった時や、先生になった時に、絶対役立つものだと思います」と肯定的に受け止めている学生が多かった。

学生が参加するの授業は、発表者に積極的な学びの姿勢が感じられたが、参加者の受け身の姿勢が拭い去れなかった。まだ改善すべき問題はあるものの、体験的に言えば、学生の学びを育てる視点からは、こうした授業は効果的な指導の1つである。

21年度後期授業では、授業改善の取り組みを実践してきたので、今後とも学生が授業に積極的に参画でき、学生の学びが深まる授業を継続していきたい。学生が参加する授業は、その成果が授業内容・方法と関連が深いものである。そして授業改善は、学部・学科カリキュラムと学生のラーニング・アウトカムとの関係で論じられる問題である。このことは、教員個人による授業方法を改善することだけで片付く問題ではない。学生の学びを育てる授業は、学士力の質保証の視点から学部・学科が一体となり、組織体のシステムとしてカリキュラムの在り方そのものを根本から見直していくべき大きな課題と言える。またこれは、大学の使命とは何かという現代的課題に直結する問題でもある。

## 【注】

- 1) 安岡高志・滝本喬・三田誠広・生駒俊明『授業を変えれば大学は変わる』プレジデント社 56-64頁 1999年11月
- 2) 浅野誠『大学授業を変える16章』大月書店 1994年1月 22-25頁
- 3) 京都大学高等教育教授システムセンター編『開かれた大学授業をめざして』玉川大学出版部 79-80頁 1997年9月
- 4) 北野秋男『日本のティーチング・アシスタント制度』東信堂 123-139頁 2006年6月
- 5) 清水亮・橋本勝・松本奈美編著『学生と変える大学授業』ナカニシヤ出版 109-135頁 2009年2月